

博士論文（要約）

日本在住コリアンのニューカマーにおける二言語併用

吉田さち

第一章 序論

1) 研究の目的

- ・1980年代以降に来日した「ニューカマー」外国人の増加と定住化。
⇒ 日本社会の多民族化が進行中（渡戸 2010）。
- ・日本在住コリアン：ニューカマーの割合が増加と定住化始まる（梶田 1994）。
- ・日本在住コリアンの言語に対する研究：オールドカマーを対象とするものが多い。
↓
- ・本研究の目的：韓国系民族学校の高校生および韓国人留学生という、日本在住コリアンのニューカマーのなかでも比較的若い世代における二言語併用の実態について、(a)社会的二言語併用と(b)個人的二言語併用という2つの視点から多角的に明らかにすること。

第二章 日本在住コリアンコミュニティの概要

1) 日本在住コリアンとは

表1：オールドカマーとニューカマーの概要

オールドカマー	<ul style="list-style-type: none">・日本の植民地支配による生活苦や強制連行など歴史的な事情によって来日した一世とその子孫。（20世紀前半に来日）・終戦後に同郷の在日コリアンや親族の呼び寄せによって、あるいは在日コリアンと婚姻関係を結ぶことによって来日した人々。（終戦～1980年代に来日）
ニューカマー	<ul style="list-style-type: none">・1989年の韓国の海外旅行自由化に加えて、日本のバブル景気に伴う社会的制度や経済的状况に誘発されて来日した人々。留学生、駐在員、日本人や永住者の配偶者などで構成される。（1980年代以降に来日）

※金美善（2009）参照

2) 留学生をニューカマーに含めた根拠

(1) 日本在住コリアンとの交流が存在する点

例) オールドカマーによる留学生への住まいや職場のあっ旋（奥田・鈴木，2001），ニューカマーによる留学生への職場のあっ旋（金美善 2009），ニューカマー同士の教会でのネットワークの形成（田嶋 2002）

(2) 日本在住コリアンコミュニティの言語使用に変化をもたしている点

例) ハングルの可視化（金美善 2009）

3) 日本在住コリアンの民族教育

- ・学校の種類
 - (1) 「在日本朝鮮人総聯合会」を運営母体とする学校法人朝鮮学園（朝鮮学校）
 - (2) 「在日本大韓国民団」を運営母体とする学校法人（韓国系民族学校）←本研究
- ・韓国系民族学校：学校教育法により「一条校」と「各種学校」に分かれる。

- | | |
|---|--|
| { | <p>一条校：文部科学省既定の学習指導要領に則ったカリキュラム施行。</p> <p>各種学校：韓国教育部のカリキュラム施行。←「維持型バイリンガル教育」(ベーカー, 1996)</p> |
|---|--|

第三章 移民の言語接触に関する基本的概念

- ・日本在住コリアンにおける言語接触：日本在住コリアンが日本語と韓国語を併用することで、両言語間でのさまざまな言語的な現象（日本語と韓国語のコードスイッチング等）が引き起こされ、それが集積して社会レベルで、韓国語の喪失や保持がもたらされること（亀井他 1996 参照） ⇒ 本研究では二言語併用に着目
- ・二言語併用：「社会的二言語併用」と「個人的二言語併用」に大別される。
⇒本研究でもこの分類を用いる。
- ・本研究に関わる概念：「ドメイン」、「コードスイッチング」
- ・ドメイン：多言語社会において一貫して一つの言語が選択される領域のこと（Fishman,1971）。家庭，友人，宗教，教育，職場等。全体像の把握と他のコミュニティとの比較が可能。一つのドメインに一つの言語しか選択されないという前提に限界点。
- ・コードスイッチング（CS）：同じ会話のやりとりのなかで、二つの異なる文法システムに属す発話を並置させること（Gumperz,1982）。
- ・CSの統語論的アプローチ（Joshi 1985, Azuma 1993, Myers-Scotton 1993）
 - | | |
|---|--|
| { | <p>「基盤言語」：コードスイッチングの文の枠組みを構築する言語。⇒本研究でも採用</p> <p>「ゲスト言語」：名詞や動詞などの内容語を提供する言語。</p> |
|---|--|
- ・CSの心理言語学的アプローチ（Singh&Backus,2000）⇒本研究でも採用
 - | | |
|---|--|
| { | <p>来日時期が遅い：L1を基盤言語とした挿入型のCS</p> <p>来日時期が早い：二言語を交互に切り替える，交替型のCS</p> |
|---|--|
- ・言語に活力を与える3つの要因（Bourhis&Taylor 1977）と韓国語の保持
 - (1) 地位の要因：日本社会では少数言語の地位が低く，多数派言語の日本語への移行が起こりやすい。
 - (2) 人口の要因：ニューカマーの移住と定住化はプラスの影響
 - (3) 制度的支援の要因：民族学校，韓国系プロテスタント教会，マスメディアの影響の大きさ。

第四章 先行研究と本稿の位置付け

1) 社会的二言語併用に関する研究において解明された点

- | | |
|---|--|
| { | <p>(1) 諸研究が行われた約30年間を通して、オールドカマー社会全体で言語シフトが進み継承語が喪失されている。</p> <p>(2) 日本在住コリアンの二言語使用・二言語能力には場面差や世代差、集団差が存在。</p> |
|---|--|

- ・場面差：年上の人や親しい人と話す場面、大勢の前やあいさつなど社交的な場面、周りに同胞が多い場面で、韓国語が使用されやすい（生越、1982、2011・任榮哲、1993 他）。
- ・世代差：日本生まれの世代で、日本語のみを使用する傾向が特に顕著（比嘉、1980・生越、2002）。
- ・来日時期による差：ニューカマーの学生の間で、出生地だけでなく、来日した年齢が低いほど韓国語使用率が低くなる（生越 2011）。
- ・集団差：①総聯系の民族学校の生徒は、学校内外では両言語を使い分けるダイグロシアの状況であり、二言語能力の側面では韓国語と日本語のバイリテラルである。
②韓国系民族学校のニューカマーの生徒：同じ相手に対する使用言語は学校の内外で大きな違いは見られない（生越、2011）。

2) 社会的二言語併用に関する研究における問題点と本研究の第五・六章の意義

- (1) 研究対象がオールドカマー中心 ⇒ ニューカマーを対象とする。
- (2) 日本在住コリアンの多様な属性に配慮した研究の不足 ⇒ 構成員を一元化した指標で位置づける。集団内のさまざまな属性（法律上の学校の種類、滞在年数、第二言語能力等）との関連性を考察する。
- (3) 日常生活全体を網羅した言語使用・接触状況をとらえる視点の不足 ⇒ 調査対象者の日常生活を反映させたドメインを使用。各ドメインでの言語使用とともに接触状況についても調査する。

3) 個人的二言語併用に関する研究において解明された点（文内 CS に限定）

- ・生野区や大阪に在住するオールドカマー一世の間では、日本語と韓国語を混ぜて用いる「混用コード」が、集団内のコードとして使われている（金美善 2000, 金静子 2002）
- ・一世の切り替え位置：文のさまざまな要素で切り替えられる（黄鎮杰 1994）。格助詞での切り替えや、単語や慣用句の切り替えが多い（金静子 2002）
- ・民族教育を受けた三世もコードスイッチングを行う（黄鎮杰（1994, 都恩珍 2001）。日本語ベースの発話では親族名称や文化語などの切り替えが多く、韓国語ベースの発話ではフィラーや終助詞・間投助詞の切り替えが多い（都恩珍 2001）。
- ・民族学校（「朝鮮学校」）で使われる混用コードが存在し、朝鮮語の一変種として定着している（植田 2001, 宋実成 2006）。

4) 個人的二言語併用に関する研究における問題点と本研究の第七・八章の意義

- (1) 研究対象がオールドカマー中心 ⇒ ニューカマーを対象とする。
- (2) 来日時期と CS との関係についての考察の欠如 ⇒ 来日時期と CS のパターンについて分析。
- (3) 多角的な視点の不足 ⇒ 社会的二言語併用と個人的二言語併用の両視点から対象の二言語併用の全体像にアプローチする。

第五章 【研究 1】 韓国系民族学校における社会的二言語併用

1) 研究の目的

- (1) 韓国系民族学校の高校生をニューカマーとオールドカマーに分類し、両グループにおける第二言語能力および韓国語と日本語の二言語使い分けに関する意識の特徴を明らかにすること。
- (2) 移動が多く多様な成育背景を持つ日本在住コリアンの集団を「移動性」を表す指標により連続的に分類し、その有効性を証明すること。

2) 研究の方法

- (1) 対象：韓国系民族学校の高校生 212 名
- (2) 調査方法：アンケート調査
- (3) 質問項目：①フェイス項目（属性に関する項目）、②二言語における四技能の能力、③ 24 の場面別の韓日二言語使い分け
- (4) 分析方法
 - ・第二言語における四技能の能力：「1 よくできる（上級）」に 1 点、「2 できる（中級）」に 2 点、「3 少しできる（初級）」に 3 点、「4 あまりできない（入門）」に 4 点、「5 全くできない」に 5 点を与え数値化。
 - ・24 の場面別の韓日二言語使い分けについての調査項目：24 場面について「韓国語」に 1 点、「どちらかといえば韓国語」に 2 点、「どちらも半々ぐらい」に 3 点、「どちらかといえば日本語」に 4 点、「日本語」に 5 点を与え数値化。
- (5) 調査対象者の分類方法
 - ・①ニューカマーとオールドカマー、②移動指数の 2 種類の枠組みにより調査対象者を分類した。
 - ・移動指数：Chambers (2000) が考案した、移動性 (mobility) を示す指標である「Regionality Index」（調査対象者の居住地、成育地、出生地、父母の出生地の 4 要素を総合して算出）の枠組みを参考に作った「移動指数」という指標を使い、調査対象者を分類する。

3) まとめ

- (1) 第二言語習得の実態
 - ・ニューカマーは、来日後短期間で、話しことばの技能から日本語能力を高めていく。
 - ・滞在期間が長くなるにつれ、優勢言語が韓国語から日本語へと交替する傾向。
- (2) 二言語併用の実態 ☆資料 1
 - ・ニューカマーは、どの場面でも日本語を使用する割合が高いオールドカマーと比べ、場面に応じて二言語を使い分ける。
 - ・ニューカマーとオールドカマーに共通して、目上や年配の相手に継承語が保持されやす

い。←先行研究を支持。

- ・「維持型バイリンガル教育」を行っている学校では、行っていない学校に比べ継承語がより保持されていた。⇒ 教育内容が第一言語の保持に与える影響を示唆。

(3) 移動性を表す指標と言語シフト

- ・ホスト社会からみて外来性の高い段階を起点としてホスト社会に根ざしていくにつれて、韓国語から日本語への言語シフトが進む様相が連続的に捉えられた。
⇒ 移住の様相が非常に多様化している近年の移民集団の言語シフトを分析する枠組みとしての応用可能性を示唆。

第六章 【研究2】留学生における社会的二言語併用

1) 研究の目的

- ・留学生の日常生活を反映させたドメインを使用して、ドメインごとの言語使用と接触状況を考察することで、留学生の日常生活における言語使用の全体像を明らかにすること。

2) 研究の方法

(1) 対象：留学生 109 名

(2) 調査方法：アンケート調査

(3) 質問項目：基本属性、帰属意識、日本語学習歴、言語能力、日常全般の言語使用度、家庭での言語使用、ドメイン別の言語使用（周囲の比率・接触度・言語使用度）、母国とのつながり

※ドメインは【学校】、【職場】、【宗教施設】、【近所】、【普段行く店】、【休日】、【生活全体】を設定。

(4) 分析方法：

- ・言語能力：二言語の四技能について「よくできる（3点）」「ある程度できる（2点）」「少しできる（1点）」「全くできない（0点）」と得点化し、技能ごとに平均得点を出した。
- ・ドメイン別の言語使用：周囲にいる人の選択肢は「韓国人のみ」「韓国人がより多い」「半々」「日本人がより多い」「日本人のみ」の5段階。韓国人との接触度・日本人との接触度の選択肢は、「かなりある」「少しある」「ほとんどない」の3段階。韓国語の使用度・日本語の使用度の選択肢は、「とても多く使う」「多く使う」「普通」「少し使う」「使わない」の5段階。各質問項目の回答について、最低値が-1、最高値が1となるように変換して示してグラフ化した。

3) まとめ

(1) 第二言語習得の実態

- ・日本語の受容技能が産出技能に比べて優勢である。←話しことばの技能が優勢のニューカマーの高校生よりも、むしろオールドカマーの高校生の韓国語習得と共通した傾向。

(2) 二言語併用の実態 ☆資料 2~4

- ・休日や教会など私的な領域で韓国人との社会的ネットワークが形成され、韓国語が使用されている。⇒ 宗教ドメインの少数派言語の言語保持への有効性 (Holmes, 1993 ・ Fishman et al, 1985) を裏付け。

第七章 【研究3】韓国系民族学校における個人的二言語併用

1) 研究の目的

- ・韓国系民族学校の高校生において、来日時期による二言語の能力が言語選択と CS にどのように関わっているのかについて、談話資料に基づく事例研究を通して考察すること。

2) 研究の方法

(1) 対象：韓国系民族学校の高校生 ☆資料 5

(2) 調査方法：親しい友人関係の女子高校生¹2人1組のそれぞれ15分前後の対話10組分収録。録音に際しては、特に話題を指定せず、普段休み時間におしゃべりする時のように話してもらうよう指示。録音場所には、話者2人以外の人のない教室を使用。

(3) 分析方法：

- ・分析資料：①録音した談話を文字化した談話資料，②フォローアップアンケート。
- ・調査対象者を、来日時期別に日本生まれの話者 (Japan Born : JB1~JB3²)、臨界期 (9歳)³以前に来日した話者 (Before Critical Period : BC1~BC8)、臨界期以後に来日した話者 (After Critical Period : AC1~AC7) の三グループに分類。
- ・分析項目：①発話で選択される言語，②来日時期別3グループにおける文内 CS の基盤言語別の切り替え項目。

3) まとめ

(1) 臨界期以後に来日した話者 (AC) の文内 CS の特徴

- ・韓国語優勢の偏重バイリンガル。
- ・談話では、韓国語を基盤とする発話のなかで、名詞や引用節の部分のみを日本語に切り替えるタイプの CS が多く見られた。←「挿入型 CS」の傾向

(2) 臨界期以前に来日した話者 (BC) の文内 CS の特徴

- ・均衡バイリンガル。
- ・談話では、節間や節内で複雑な切り替えが起こっているため、基盤言語が判定不可能な

¹ Auer & Di Luzio (1984) によると、コードスイッチングは移民コミュニティの10代の間で最も頻繁に見られると言われる。

² JB4 は日本語が母語の偏重バイリンガルであるため、JB4-AC7 の対話は4章以降の分析からは除外した。

³ 臨界期については、提案者である Penfield & Roberts (1959) の9歳とする説や Lenneberg (1967) の12、13歳とする説など諸説ある。発達心理学の分野では、言語習得の過程で9歳になると困難になることがあると言われている。これに基づき本稿では臨界期を9歳とする。

発話も多く見られる。

- ・ 文内 CS では日本語を基盤とする割合が高く、日本語基盤の発話では、韓国語の名詞や節への切り替えが多いものの、多様な項目で切り替えが行われていた。←「交替型 CS」の傾向

(3) 日本生まれの話者 (JB) の文内 CS の特徴

- ・ 三人が均衡バイリンガルで一人が日本語優勢の偏重バイリンガル。
- ・ BC と同様、日本語が基盤の発話が多く、次いで基盤言語が不明の発話が多かった。
- ・ 日本語基盤の発話では、名詞や節の切り替えに集中。韓国語基盤の発話では、日本語の接続詞や感動詞への切り替えが多い。←「交替型 CS」の傾向

(4) 来日時期と文内 CS の関係

- ・ 来日時期が遅い（臨界期以後に来日）グループでは韓国語の発話に日本語の要素を挿入するタイプの CS が行われていた。
- ・ 一方、来日時期が早い（臨界期以前に来日・日本生まれ）グループでは、発話内の多様な要素で韓国語と日本語を交互に切り替えるタイプの CS が行われていた。



世界の移民集団に共通する特徴である、「L1 を基盤とした挿入型の CS から交替型の CS へ移行する一般的な傾向」（Singh & Backus, 2000）と一致。

第八章 【研究 4】留学生における個人的二言語併用

1) 研究の目的

- ・ 滞日時期の比較的短い留学生を対象として、彼らの CS の特徴を明らかにすること

2) 研究の方法

- (1) 対象：大学院の女子留学生 ☆資料 6
- (2) 調査方法：親しい友人関係の女子留学生 2 人 1 組のそれぞれ 40 分程度の対話を 3 組分収録。録音に際しては、特に話題を指定せず、普段休み時間におしゃべりする時のように話してもらうよう指示。録音場所には、話者 2 人以外の人のない部屋を使用。
- (3) 分析方法：
 - ・ 分析資料：①録音した談話を文字化した談話資料，②フォローアップアンケート。
 - ・ 分析項目：①発話で選択される言語，②来日時期別 3 グループにおける文内 CS の基盤言語別の切り替え項目。
 - ・ 臨界期以後に来日した高校生 (AC) の CS のパターン（挿入型 CS）との比較も行う。

3) まとめ

(1) 留学生の文内 CS の特徴

- ・ 留学生の談話では主に韓国語が使われている。

- ・混用コードが使われる場合も、基盤言語は多くの場合、韓国語である。
- ・混用コードでは、韓国語を基盤として日本語の単語を挿入するという、挿入型 CS の性質が強い。
- ・特徴は、臨界期以後に来日した高校生の CS の特徴と類似している。ただし、臨界期以後に来日した高校生よりも留学生の方で使用言語がより韓国語中心となっている。

(2) 集団内でのコードとしての混用コード (CS 発話)

- ・留学生が韓国語中心の言語使用を行っている理由として、混用コードが集団内のコードとして定着しているか否かが影響していると考えられる。
- ・民族学校の高校生の間では、日本語と韓国語の混用コードが集団内で広く使用されている (朴良順, 2006)。⇒ 高校生の間では身内のコードとして混用コードが存在。
- ・留学生は、韓国語を母語とし、臨界期以後に来日した。高校生に比べて言語的背景が均質的であり、互いの意思疎通は韓国語だけで十分に可能である。また、数年後に帰国する予定を持ち、韓国への帰属意識が強い。⇒ 言語的・心理的な側面が影響し、留学生において混用コードは集団内のコードとして定着していないと考えられる。

第九章 結論

1) 本研究の意義

- ・これまで情報の少なかったニューカマーの若い世代の二言語併用の実態について明らかにした。⇒ 今後の壮年層や就業者の特徴と比較する際の基礎的な資料。
- ・韓国系民族学校の高校生および大学院の留学生という 2 つの集団に対して、社会的二言語併用と個人的バイリンガルの両観点から多角的に考察した点に独自性がある。

2) 今後の課題

- ・日本在住コリアンのニューカマーの二言語併用の全体像に迫るために、今後壮年層や社会人など、その他の世代や属性の人々の傾向を明らかにする必要がある。
- ・個人的二言語併用に関する分析では、文内 CS 以外の言語的現象に対する分析は扱えなかった。



これらの課題を今後の研究で蓄積し、国内外の移民の二言語併用および言語シフトに対する理論構築の一助となることを目指す。

参考文献

- Auer, J.C.P. & Di Luzio, A. (eds.) (1984) *Interpretive Sociolinguistics: Migrants – children – migrant children*. Tübingen: Narr.
- Azuma, S. (1993) The frame-content hypothesis in speech production: evidence from intrasentential code-switching. *Linguistics*, 31. Mouton de Gruyter.
- ベーカー・コリン (1996) 『バイリンガル教育と第二言語習得』 (岡秀夫訳)、大修館書店

- Chambers, J. K. (2000) Region and Language Variation. *English World-Wide*21:2.
John Benjamins.
- 都恩珍 (2001) 「事例研究：日本語 - 韓国語混合文における日本在住コリアンのコードスイッチング」『日本文化學報』10、韓国日本文化學會 (韓国)
- Fishman, J. A (1971) The sociology of language. In J. Fishman (ed.) *Advances in the Sociology of Language, Volume1*. The Hague: Mouton.
- Fishman, J. A., M. H. Gertner, E.G. Lowy & W. G. Milan. (1985) Ethnicity In Action: The Community Resources of Ethnic Languages In The United States. In J. A. Fishman, M. H. Gertner, E. G. Lowy & W. G. Milan: *The Rise and Fall of the Ethnic Revival*. Berlin: Mouton.
- Gumperz, J. J. (1982) Conversational code-switching. In J. J. Gumperz (ed.) *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 比嘉正範 (1980) 「バイリンガルの言語生活」『日本における二言語併用 (最終報告)』、筑波大学二言語併用研究会
- Holmes, J., M. Roberts., M. Verivaki & 'Anahina' Aipolo. (1993) Language Maintenance and Shift in Three New Zealand Speech Communities. *Applied Linguistics*14(1).
- 黄 鎮杰 (1994) 「在日韓国人の言語行動 - コードスイッチングにみられる言語体系と言語運用 - 」『日本学報』13、大阪大学文学部日本語学研究室
- 任榮哲 (1993) 『在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態』、くろしお出版
- Joshi, A. (1985) Processing of sentences with intrasentential code-switching. In D. R. Dawty, L. Karttunen & A. Zwicky (eds.) *Natural Language Pausing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 梶田孝道 (1994) 『外国人労働者と日本』、日本放送出版協会
- 亀井孝他編 (1996) 『言語学大辞典 第6巻 述語編』、三省堂
- 김정자 (2002) 『재일 한국인 1 세의 한국어 일본어 혼용 실태에 대한 연구 -오사카 지역을 중심으로-』、태학사
- 金美善 (2000) 「日本在住コリアンの言語接触に関する社会言語学的研究 - 大阪市生野周辺をフィールドとして - 、大阪大学大学院文学研究科日本専攻、平成12年度博士学位申請論文
- 金美善 (2009) 「言語景観における移民言語のあらわれかたーコリアンコミュニティの言語変容を事例に」『日本の言語景観』(庄司博史・P・バックハウス・F・クルマス編)、三元社
- Lenneberg, E.H. (1967) *Biological Foundations of Language*. New York: Wiley.
- Myers-Scotton, C. (1993) *Duelling Languages*. Oxford: Oxford University Press.
- 生越直樹 (1982) 「在日韓国・朝鮮人の二言語併用アンケート調査の結果からー」『待兼山論叢 日本学篇』16、大阪大学文学会

- 生越直樹 (2002) 「日本在住コリアンの言語使用状況とその推移ーアンケート調査の結果から」 第 192 回朝鮮語研究会配布資料
- 生越直樹 (2011) 「日本在住コリアンにおけるニューカマーの子供たちの言語使用ー東京の民族 学校でのアンケート調査からー」 『日本研究』 50、韓國外國語大學校 外國學綜合研究센터 日本研究所
- 奥田道大・鈴木久美子編 (2001) 『エスノポリス・新宿／池袋ー来日 10 年目のアジア系外国人調査記録ー』
- 朴良順 (2006) 「日本語・韓国語間のバイリンガルとコードスイッチング」 (真田信二監修 任榮哲編 『韓国人による日本社会言語学研究』 おうふう)
- Penfield, W. & Roberts, L. (1959) *Speech and brain mechanisms*. New York: Atheneum.
- Singh, R., & Backus, A. (2000) Bilingual Proficiency and Code-switching/Mixing Patterns. In Singh, R., (ed.) *The yearbook of South Asian Languages and Linguistics, 2000*. New Delhi: Sage.
- 宋実成 (2006) 「朝鮮学校児童らの朝鮮語使用-談話文字化資料から見た文法諸形式の使用状況について-」 『移民コミュニティの言語の社会言語学的研究 研究成果報告書(2) 日本在住コリアンの言語』
- 田嶋淳子 (2002) 『世界都市・東京のアジア系移住者 第二版』、学文社
- 植田晃次 (2001) 「『総聯朝鮮語』の基礎的研究ーそのイデオロギーと実際の重層性ー」 『「正しさ」への問い』、三元社
- 渡戸一郎 (2010) 「多民族・多文化化する日本社会 - 問題の所在とアプローチの視点」 渡戸一郎・井沢泰樹編著 (2010) 『多民族化社会・日本ー<多文化共生>の社会的リアリティを問い直す』 明石書店

参考資料

<資料 1>

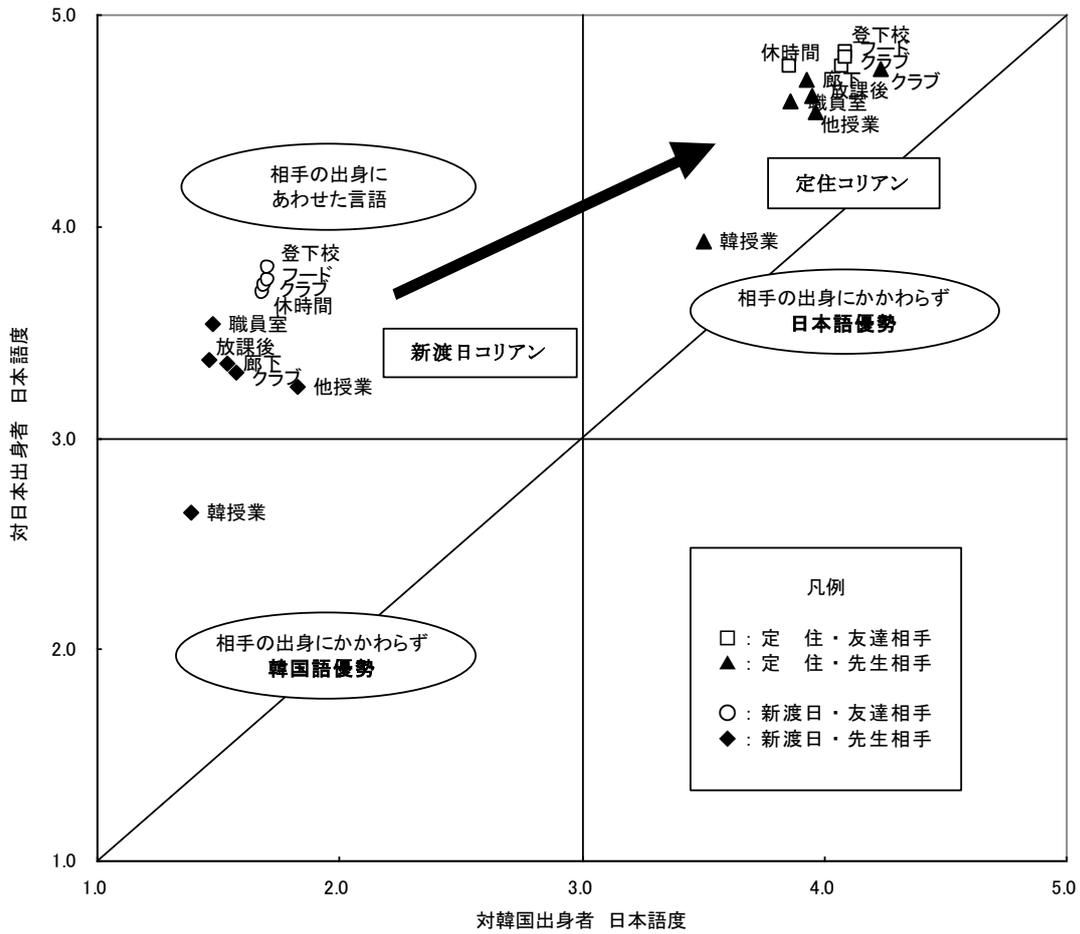


図 5-10 : ニューカマーとオールドカマーの相手の出身地別使い分け (第五章)

<資料 2>

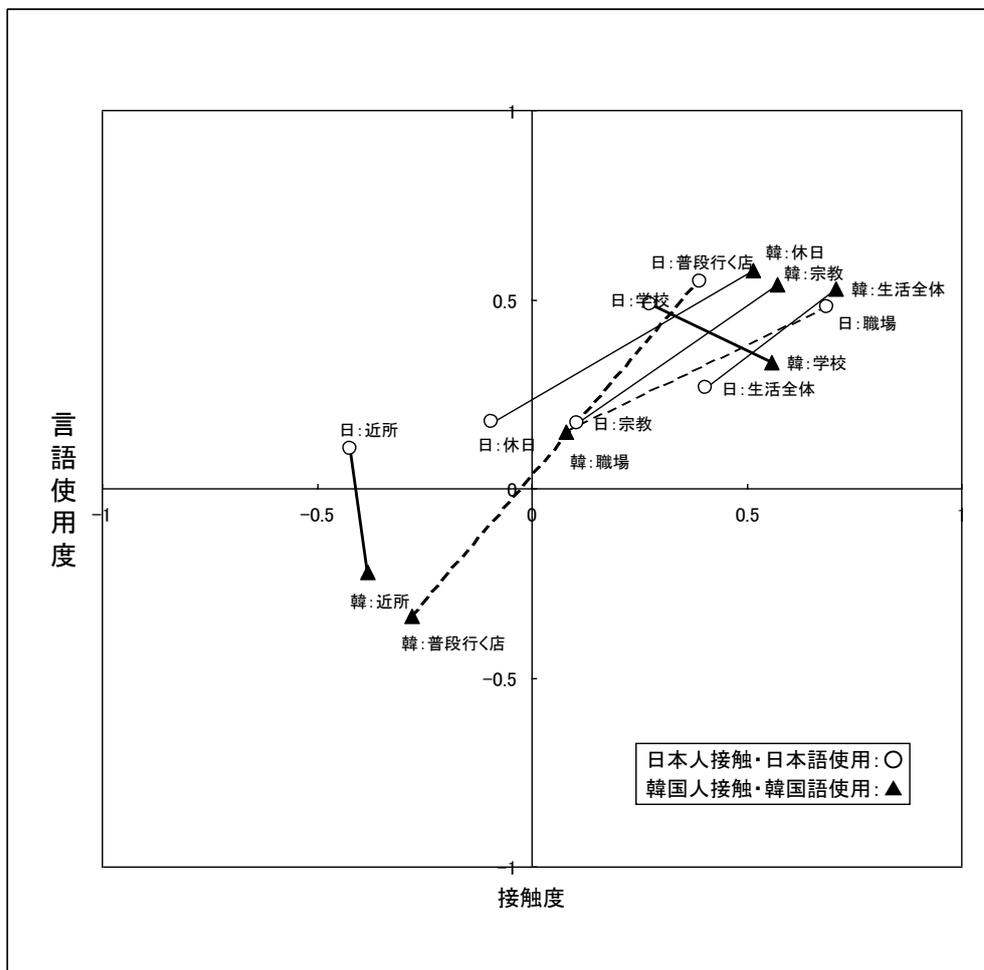


図 6-6 : 接触度と言語使用度 (第六章)

<資料 3>

表 6-5 : 各象限における接触・言語使用の量的特徴

		接触	
		少ない	多い
言語使用	多い	会うことが少ない相手の言語をよく話す (第2象限)	多く会う相手の言語をよく話す (第1象限)
	少ない	会うことが少なく相手の言語も話さない (第3象限)	多く会う相手の言語を話さない (第4象限)

<資料 4>

表 6-6 : 接触度と言語使用度における日本・韓国の割合によるドメインの分類

		接触度	
		韓 > 日	日 > 韓
言語使用度	韓 > 日	休日 宗教 生活全体	
	日 > 韓	学校 近所(接触度は ほぼ同じ)	職場 普段行く店

<資料 5>

表 7-1 : 調査対象者

話者番号	JB1	JB2	JB3	JB4	BC1
来日時期	日本生まれ	日本生まれ	日本生まれ	日本生まれ	臨界期以前
二言語能力	均衡	均衡	均衡	偏重	均衡
母語	日本語	日本語	日本語	日本語	韓国語・日本語
学校	東京韓国学 校	東京韓国学 校	東京韓国学 校	金剛学園	金剛学園
学年	高 3	高 3	高 3	高 1	高 2
年齢	17 歳	17 歳	17 歳	15 歳	16 歳
父母出生地	ともに日本	ともに韓国	父日本・母韓 国	父韓国・母日 本	ともに韓国
来日年齢	—	3 ヶ月	—	—	2 歳
在日年数	17 年	17 年	17 年	15 年	14 年
第二言語学 習期間	12 年	14 年	12 年	4 年	各 16 年

話者番号	BC2	BC3	BC4	BC5	BC6
来日時期	臨界期以前	臨界期以前	臨界期以前	臨界期以前	臨界期以前
二言語能力	均衡	均衡	均衡	均衡	均衡
母語	韓国語	韓国語	韓国語	韓国語・日本 語	韓国語・日本 語
学校	金剛学園	白頭学院	白頭学院	東京韓国学	東京韓国学

				校	校
学年	高 2	高 3	高 3	高 3	高 3
年齢	16 歳	18 歳	17 歳	18 歳	17 歳
父母出生地	ともに韓国	ともに韓国	ともに韓国	ともに韓国	ともに韓国
来日年齢	9 歳	9 歳	3 歳	6 歳	4 歳
在日年数	7 年	9 年	14 年	13 年	13 年
第二言語学 習期間	16 年	9 年	14 年	K18 年 J13 年	K15 年 J13 年

話者番号	BC7	BC8	AC1	AC2	AC3
来日時期	臨界期以前	臨界期以前	臨界期以後	臨界期以後	臨界期以後
二言語能力	均衡	均衡	偏重	偏重	偏重
母語	韓国語	日本語	韓国語	韓国語	韓国語
学校	東京韓国学 校	東京韓国学 校	金剛学園	金剛学園	白頭学院
学年	高 1	高 1	高 2	高 2	高 2
年齢	16 歳	15 歳	17 歳	16 歳	16 歳
父母出生地	ともに韓国	ともに韓国	ともに韓国	ともに韓国	ともに韓国
来日年齢	2 歳	7 歳	15 歳	12 歳	13 歳
在日年数	14 年	8 年	2 年	3 年	3 年
第二言語学 習期間	14 年	15 年	2 年	6 年	3 年
話者番号	AC4	AC5	AC6	AC7	
来日時期	臨界期以後	臨界期以後	臨界期以後	臨界期以後	
二言語能力	偏重	偏重	偏重	偏重	
母語	韓国語	韓国語	韓国語	韓国語	
学校	白頭学院	白頭学院	白頭学院	金剛学園	
学年	高 2	高 3	高 3	高 1	
年齢	16 歳	18 歳	17 歳	15 歳	
父母出生地	ともに韓国	ともに韓国	ともに韓国	ともに韓国	
来日年齢	6 歳、13 歳	16 歳	13 歳	13 歳	
在日年数	5 年	2.5 年	4 年	2 年	
第二言語学 習期間	5 年	2.5 年	4 年	2 年	

<資料 6>

表 8-1：調査対象者の内訳

話者番号	FS1	FS2	FS3	FS4
来日時期	臨界期以後	臨界期以後	臨界期以後	臨界期以後
二言語能力	偏重	偏重	均衡	均衡
母語	韓国語	韓国語	韓国語	韓国語
学校	大学院	大学院	大学院	大学院
年齢	29 歳	33 歳	30 歳	31 歳
父母出生地	韓国	韓国	韓国	韓国
未婚／既婚	未婚	未婚	未婚	未婚
在日年数	5 年	2 年	6 年	6 年
第二言語学習期間	4 年	4.8 年	2 年	0 年

話者番号	FS5	FS6
来日時期	臨界期以後	臨界期以後
二言語能力	偏重	均衡
母語	韓国語	韓国語
学校	大学院	大学院
年齢	31 歳	32 歳
父母出生地	韓国	韓国
未婚／既婚	未婚	未婚
在日年数	3 年	5 年
第二言語学習期間	不明(日本で独学)	1.6 年